

# 飛鳥寺塔心礎出土の雲母

**雲母の概要** 飛鳥資料館では1957年の飛鳥寺跡第3次発掘調査<sup>1)</sup>において塔心礎周辺から出土した遺物の調査研究を継続している。本稿はそのうち、雲母について記す。

雲母はすべて破片であり、表8のとおり、現状で12の整理用小箱または小袋に納められている。主要な雲母を図21と巻頭図版2に示す。報告書では鎌倉時代にとりこぼして心礎上に散乱した遺物とみている。

雲母の出土層位については、調査日誌に記述がある。7月18日に塔中央の四角い掘方の西半を心礎上面まで掘り下げた際、心礎を覆って全体に厚さ1.5寸ほどの木質層（木炭の層）があった。その中に残されていた遺物として、勾玉、トンボ玉、ガラス小玉、金環、金銀の粒と延板、水晶切子玉、銀空玉、金銅円板、刀子、不明弯曲鉄器などとともに「雲母破片 数枚」と記されている。

調査時の地区割は不明瞭な部分があるが、遺物にともなうラベルには「北ノ2」「北辺ノ2」とあることから、心礎上面の西半の中でも北側の隅付近で出土したと推定できる。同じくラベルにある「底」「底の底」は、掘方の底すなわち心礎上にあった厚さ1.5寸（約4.5cm）の木炭の層と、さらにその中でも礎石直上を指すのであろう。同じ記載は金銅製打出金具やガラス小玉等にもみられる。ラベルのない雲母についても、再整理前の各シャーレ等に金銅製打出金具や琥珀玉、ガラス小玉などの破片と一緒に収められていたことから、基本的にすべて同じ層からの出土であり、雲母は一括で扱ってよい遺物と考えられる。

雲母の点数について日誌には「数枚」、報告書には「細片が数個」とあるが、現状では細片が多数ある。後の整理作業で新たにみつかった破片もあるが、劈開による剥離や細片化で破片数が増えた可能性も高い。

雲母の形状は不整形で、一部に直線的な部分などもあるが、人為的加工かどうか判断は難しい。穿孔や金箔貼りは確認できない。厚さは薄いものは0.1mmに満たない。巻頭図版2左上の破片（37-8）は大きさ2.2×1.5cm、厚さ0.8mm、重量0.2gで厚さと重量が最大の破片。大きさが最大の破片（7-3）は2.6×2.0cm。

表8 塔心礎出土雲母一覧

番号	層位	遺物	数量等	重量(g)
1-1A5	北ノ2ソコ	鉱物（雲母片）	細片	<0.1
2-5C		鉱物（雲母片）	2	<0.1
3-9B	北辺ノ2	鉱物（雲母片）	細片	<0.1
7-3		鉱物（雲母片）	43	0.2
7-4B		鉱物（雲母片）	細片	<0.1
14-7A		板状銅製品 雲母付着	1	-
15-5D3		鉱物（雲母片）	1	<0.1
15-5E3		鉱物（雲母片）	4	<0.1
22-1B	北辺ノ2底	鉱物（雲母片）	2	<0.1
37-8		鉱物（雲母片）	42	0.7
43-1	底の底	鉱物（雲母片）	1	<0.1
44	底	鉱物（雲母片）	細片	<0.1

雲母の重量については、大半の破片が0.1g未満であり、正確に計量できなかった。最大の破片（0.2g）を含めた37-8全体で0.7g、7-3全体で0.2gなので、雲母すべてをあわせても合計1gほどであろう。

14-7Aの板状銅製品（図21）に付着している雲母は、本来の輪郭が矩形であったことを推察させる。板状銅製品は4.3cm×2.5cm、厚さ3.6mmの隅丸方形で、一辺を欠損している。ほぼ純銅で微量の銀を含み、表面には金鍍金の残存と考えられる微細な金色部分が2箇所ある<sup>2)</sup>。付着している雲母から、雲母の厚さはもともと極めて薄いことが確認でき、大きさは2.2cm×0.9cm以上と推測できる。また、付着している雲母と板状銅製品の間に鍍金層がほとんど残存していないことから、腐食過程で鍍金層が失われたとすれば、雲母と銅製品は当初は密着しておらず、埋没過程で付着したと考えられ、本来組み合うものとは限らない。

**古代における雲母の埋納** 飛鳥寺の塔心礎出土品に雲母が含まれているのはなぜであろうか。出土状況からすれば、塔の心柱の周囲に置かれた奉獻品のひとつとみるのが妥当である。我が国の古代寺院の心礎や舍利に関連して、このような雲母出土例は他にないようであるが、飛鳥寺では蛇行状鉄器など他に例のない遺物が埋納されていたので、他の古代寺院に雲母埋納が見られないことは驚くにはあたらない。その一方で、朝鮮半島には雲母を古墳や古代寺院に埋納した例がある。

飛鳥寺との関係で最も注目されるのは、百済の王興寺である。塔心礎の南寄りに舍利孔があり、心礎上面からその南側にかけてガラス玉、耳環、金銅製品、刀子など、豊富な遺物が納められていた。心礎のすぐ外側にあった一群の遺物の中に、雲母製の花形装飾品と逆三角形をした鉄芯があった。花形装飾品は円形の中心部の周囲に6弁の花弁を二重に重ね、花弁には菱形の金箔をあしらった華麗なものである。鉄芯は百済の官帽の芯で、古墳から銀製立花飾をともなう事例が複数出土している。王興寺の出土品も官帽の装飾と考えられるが、雲母製の装飾



図21 雲母が付着した板状銅製品 (14-7A)

が類例のない特殊なものであることから、通常の官帽ではなく王族に関わるものとの推定もある<sup>3)</sup>。王興寺の創建は、舍利容器の銘文から577年と知られる。飛鳥寺とは年代的にも近く、飛鳥寺の雲母もこのような飾りであった可能性を考えさせる。

一方、先行研究<sup>4)</sup>によれば、古代東アジアでは葬送に雲母が用いられた事例がある。とくに新羅の都・慶州では、皇南大塚南墳・北墳、天馬塚、金鈴塚、飾履塚などの古墳から、柳葉形や隅丸三角形、心葉形で有孔のものなどが、木棺内に散布された状況や冠の下などから見つかっている。また、伝慶州市校洞出土の位至三公鏡は鏡背に円形や多角形の雲母環珞、纖維などが付着し、雲母は鏡箱の装飾と推定されている。これらの事例から、新羅では5世紀代を中心に雲母埋納があり、6世紀代に一部が残るとみられる。

また、日本でも5世紀後半の群馬県井出二子山古墳に有孔滴水形の雲母装飾がある。ほかにも少数ながら6世紀後半を中心として古墳からの雲母出土例があり、奈良県珠城山1・3号墳や滋賀県和田1・11号墳などでは石棺内や玄室床面にまかれたような状況とされる。いずれも新羅の影響が考えられている。

中国では漢代以降、墓室で雲母が使用された事例がある。6世紀代にも遺骸の周囲に雲母片と金箔が散在していた事例などがあり、文献には雲母の効能で遺骸が腐乱しなかったという説話も複数ある。

このような各地の葬送にともなう雲母は、神仙思想や道教との関係が考えられる。神仙思想では雲母は仙薬の一つであり、その効能は身が軽くなつて長生きする、仙人になる、そして遺骸の腐朽を防ぐといったものである。

このほか、6世紀の北周田弘墓では金箔を貼りつけて文様に切り抜いた雲母装飾の破片が多量に出土しており、輿や輦の装飾、あるいは他の器物に使われていた雲母が散布された可能性が考えられている。

このように、古代東アジアにおける雲母の埋納は、わずかな装飾品の副葬例を除き、大半が神仙思想や道教と関連付けて理解される。

飛鳥寺塔心礎の雲母を考えるにあたり、釈迦の遺骨たる舍利を納めた塔はいわば墓、靈廟であり、その主体である舍利への供養具は古墳の副葬品に相当するもの<sup>5)</sup>と考えてよければ、飛鳥寺の舍利孔の周囲に置かれた蛇行状鉄器や挂甲などはまさに釈迦のための副葬品といえよう。そうであれば、飛鳥寺の雲母を古墳出土の雲母と同様の文脈で捉えられる可能性もなくはない。しかしながら、飛鳥寺塔心礎における雲母の存在を神仙思想や道教で理解するのは難しい。やはり参考となるのは百濟王興寺の雲母装飾といえよう。

そう考えたときに注目されるのは、『扶桑略記』に飛鳥寺塔心礎での舍利埋納に馬子ら百余人が百濟服で参列したと記されていることである。王興寺と同様に雲母装飾をもつ百濟式官帽が納められた可能性を考えさせる。しかし、飛鳥寺には官帽の鉄芯らしきものはない。雲母は少量で、明確な人為的整形も指摘しにくいという現状を重視すれば、もっと簡単な雲母の飾りだった可能性、あるいは、貴重な鉱物として納めた可能性も残る。

**おわりに** 飛鳥寺塔心礎出土の雲母は何らかの装飾品だった可能性が高いと考えるが、破片は少量で、本来の姿を推定する手がかりは乏しい。しかし、百濟との密接な関係の中で考えれば、埋納儀礼にともなう重要な遺物の一つだったことはあきらかである。今後は塔心礎出土品に含まれている他の鉱物についても調査研究をすすめたい。

本稿は仏教美術協会研究等助成金の成果の一部である。

(石橋茂登)

## 註

- 1) 奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958。
- 2) 分析は田村朋美(都城発掘調査部)に依頼した。
- 3) 山本孝文「百濟古墳の副葬品と王興寺舍利莊嚴具」『古代東アジアの仏教と王權－王興寺から飛鳥寺へ－』勉誠出版、2010。
- 4) 朝鮮総督府『慶州金鈴塚飾履塚 大正13年度古蹟調査報告』1931。  
菅谷文則「雲母」『北周田弘墓』勉誠出版、2000。  
高崎市教育委員会『史跡保渡田古墳群井出二子山古墳』(第二分冊)、2009。
- 5) 門田誠一「古墳出土の雲母片に関する基礎的考察－東アジアにおける相関的理解と道教的要素－」『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社、2006。  
門田誠一「中国古代墳墓出土の雲母片略論」『日文研叢書』42、国際日本文化研究センター、2008。  
金台植「부여 왕흥사지 昌王銘 사리구에 관한 고찰」『文化史學』28、韓國文化史研究會、2008。